古事記と景観・天文考古学

東海大学文学部歴史学科考古学専攻　北條芳隆

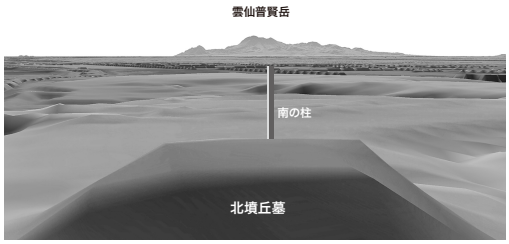
１．景観・天文考古学とはなにか

古今東西を問わず、人々は居住地の周辺で観察される景観や天体現象を日常生活や祭祀に取り込んできました。とりわけ祭祀に関わる遺跡のなかには、神聖視された場所に軸線を揃えてみたり、祭祀の日取りに則した配置をとってみたりする、といった事例が数多く存在します。神社や寺院だけでなく、弥生時代遺跡や古墳も例外ではありません。景観・天文考古学とは、そのような営みの蓄積や繰り返しのありようを見据え、過去の人々が抱いた自然への畏怖心や信仰に関わるテーマを掘り下げる研究のことです。

現在のGPS環境や過去の天体運行を再現する技術の発達は、こうした研究を可能にしています。遺跡の位置情報と周辺景観との関係や、天体運行との関係を詳しく検討することができるからです。今回は『古事記』に記された地名（山の名称）や信仰との関係について、さらに当時の人々が抱いた他界観について、景観・天文考古学の立場からはどのような解釈が提示できるかをお話しします。

２．　黄泉国と山中他界

『古事記』本文に採録された黄泉国探訪譚を素直に読めば、「黄泉国」とは木漏れ日が射し込む山中であったことが確認できます。定説的な地下世界ではありえません。



考古学的な状況との対応関係をみれば、弥生時代後期（紀元1世紀）後半以降、瀬戸内や日本海沿岸地帯では、墓域は山中に移される現象が広く認められ、その後の古墳時代前期（紀元4世紀）にまで引き継がれます。古墳時代後期（紀元6世紀）以降にも、再び山中を墓域として利用する動きが活発化します。別紙資料６に例示したとおりです。山を墓域として人為景観化する社会のもとで構想される他界や冥界であれば、それが山中に求められたとみても不自然さはありません。現実の景観に応じて他界のありようも創造されるからです。「黄泉国」は素直に比婆の山であったと読むべきです。事実『古事記』の編者太安万侶自身も平城京の北東部一帯の山間部斜面に埋葬されました。

根の堅州国は山中の地下　ただしイザナミが眠る暗黒の「殿」は問題です。それは黄泉国内に設けられた個別埋葬地としての古墳に対応するのですが、その内部は地中や地下につながる空間だとして捉えられた可能性を否定できません。洞窟の内部についても同様の脈絡で理解できるでしょう。だとすれば、山中の地下はスサノヲが赴いた「根の堅州国」・「根国」に該当すると理解できます。つまり黄泉国＝山中、根の堅州国＝山中の地下という図式が成り立つのです。山中の地下を重視する理由

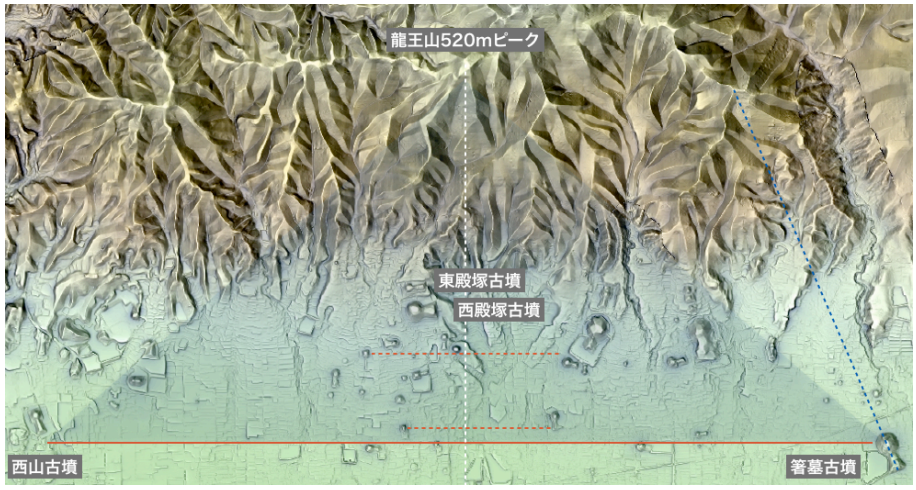
は、甚大な災害をもたらす火山の噴火や地震の震源域をそこにみた可能性が高いと考えられるからです。

考古学的な状況との対応関係としては、雲仙普賢岳に軸線を向けた佐賀県吉野ヶ里遺跡の神殿建築（紀元1世紀）や、富士山を睥睨する静岡県の前方後方墳（紀元３世紀）の存在が指摘できます（前頁図参照）。人智を超えた超然的なパワーの源泉を火山にみいだし、死者の魂をそこに向かわせ合一させることを通じて、その地下に坐す荒ぶる神々との調停ないし融和を諮ったのだと理解できます。景観史学の保立道久説を参照した結果、私も以上のように考えます。

３．大和東南部古墳群の配列と龍王山

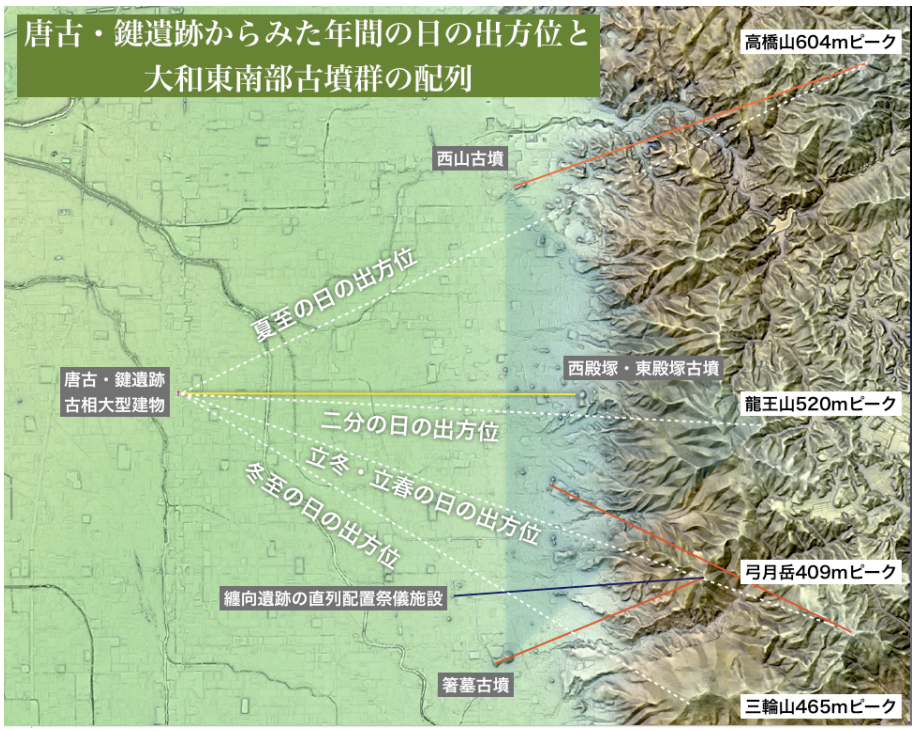
初期の大古墳群　神武東征以後、大和王権の舞台は奈良盆地に移されます。考古学では第10代の崇神天皇以降の諸天皇（大王）については実在性が高いと認めており、考古学的な年代観との比較によって、伝崇神陵以後の諸陵については二・三の誤認はあるものの、宮内庁の治定（どの古墳がどの天皇や皇后の古墳かを定める）がおおむね正しいと判定しています。このうち伝倭迹迹日百襲姫墓・大市墓（箸墓古墳）、伝崇神陵（行燈山古墳）、伝景行陵（渋谷向山古墳）などの巨大前方後円墳が集中して築かれたエリアを大和東南部古墳群と呼ぶことにします。大和政権が奈良盆地に築いた最初の大古墳群であり、年代は紀元3世紀後半から4世紀後半となります。

龍王山520m峰を頂点とする配列　そしてこの古墳群中にある前方後円（方）墳の配列状態をGPS観測によって検討したところ、興味深い配列であることがわかりました。古墳群の頂点に築かれたのは西殿塚古墳（伝手白香皇女墓・衾田陵–本例については治定ミス）と東殿塚古墳の２基で、標高135mの最高所に築かれ、これら２基は龍王山520mピークから延びる尾根筋上に位置しています。古墳群の南端は箸墓古墳で北端は西山古墳となり、どちらも標高74mの山際に築かれています。さらにこれら２基の古墳の中間点を求めると、その緯度は龍王山520mピークと誤差なく一致します。ですからこの古墳群は、東側にそびえる龍王山520mピークを背景上の頂点と定め、仮想上の二等辺三角形を呈する造墓エリアとしたもので、底辺の両端に箸墓古墳と西山古墳を配するものだったことがわかります。



いいかえれば大和東南部古墳群は、東にそびえる龍王山を背景にして、そこから下降する標高差約60mの裾付近の南北約６㎞の範囲に造墓エリアを定めたものであり、諸陵の位置は高低差によって序列化される、そのように可視化する意図のもとに造られたと考えられるのです（上図参照）。なお箸墓古墳と西山古墳の間に引いた破線部には現在の上ッ道が延び、行燈山古墳と波多子塚古墳の間に引いた破線部には現在の山辺の道が重なります。これら２道と古墳の配列関係が重なる現象は偶然の一致ではないと私は考えます。

唐古・鍵遺跡からみた日の出との関係　では龍王山520mピークはなぜこの古墳群の背景に選ばれたのでしょうか。解答の糸口は奈良盆地の中央に築かれた唐古・鍵遺跡にありました。唐古・鍵遺跡は



奈良盆地の弥生時代を代表する巨大環濠集落跡です。環濠の規模は日本列島最大で、弥生時代の前期に北部九州地方の弥生人が稲籾をたずさえ稲作文化を最初に持ちこんだ遺跡だとも考えられており、渡来系の人間の埋葬もこの遺跡の周囲から発見されています。奈良盆地における弥生文化の拠点であり、そうした性格もあって、縄文時代の晩期終末から古墳時代前期（紀元前５世紀～紀元４世紀）までの長期にわたって営まれました。

この遺跡の２箇所からは巨大な高床倉庫跡がみつかっており、稲束の収容施設だけでなく宗教的な儀礼もここで執りおこなわれた可能性が高いと考えられています。このうち弥生中期前半の建物を古相の大型建物、弥生中期後半の建物を新相の大型建物と呼ぶことにします。

そしてこれら大型建物の位置からGPS観測をおこない、天体主シミュレーション分析を併せて点検してみると、先の問いへの回答が可能になりました。年代を紀元前300年にセットして当時の年間の日の出方位と東の山並との関係を点検してみると、夏至の日の出は高橋山から、冬至の日の出は三輪山から、春分・秋分の日の出は龍王山520mピークからであることが判明したのです。つまり古相の大型建物からみた春分・秋分の日の出を迎える嶺が、のちの大和東南部古墳群の配列に引き継がれたと理解されるわけです。弥生時代の暦は日の出暦であった可能性が高く、春分・秋分は年間の日の出の範囲の中央値ですから、その指標として龍王山520mピークは重視され、祭祀においても崇拝の対象となった可能性が高いのです。上の図に概要を示しました。

なお新相の大型建物からの計測結果も同様ですが、この建物の周囲の区画は冬至の日の出側すなわち三輪山を向いています。弥生中期の後半以降は冬至の日の出が重視され、そのことが三輪山信仰の起点になったと考えられるのです。新相の大型建物付近からみた2014年の春分の日の出の情景を下に示しています。紀元前300年の春分の日の出は、写真の情景より太陽（視直径は0.53°）は0.1°右寄りから昇ったと推計できます。現在よりさらに龍王山520mピークに近かったわけです。

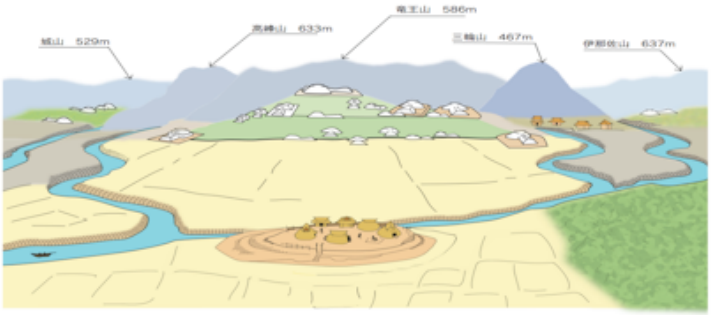
西山古墳と箸墓古墳の軸線　次に大和東南部古墳群の北端に築かれた西山古墳ですが、この古墳は高橋山に墳丘の軸線を向けていることがわかります（上図参照）。高橋山は唐古・鍵遺跡からみた夏至の日の出の嶺でした。石上神宮の元宮がこの嶺中にある磐座だという伝承が地元に残されていることも重要です。

また箸墓古墳の墳丘の軸線は弓月岳409mピークに向けられています（上図参照）。初期大和王権の中枢であったといわれる纒向遺跡の大型建物の軸線も弓月岳に向けられていますが、この峰は唐古・鍵遺跡からみたとき、立春と立冬の日の出の嶺である巻向山の前景として重なって映ります。つまり箸墓古墳が向く先にそびえる弓月岳は、唐古・鍵遺跡で培われたと推測される日の出暦の伝統に

沿って表現すれば、冬の到来と春の訪れを告げる嶺でもあったといえるわけです。

坐東朝西のランドスケープ・デザイン　このような分析の結果、再現された大和東南部古墳群の情景をラフスケッチとして描いたものが右図の下段です。前景が唐古・鍵遺跡、後景が龍王山であり、山裾には大和東南部古墳群が広がります。唐古・鍵遺跡からみた龍王山山帯は年間の日の出の範囲と重なります。またこの山帯は東側の水源地にあたります。その山際に初期大和王権を担った重要人物たちの古墳が序列化されつつ営まれ、南北両端の前方後円（方）墳は夏至の日の出の嶺と立春・立冬の日の出の嶺に向けて軸線を揃えて築造されました。春分・秋分の日の出の嶺の直下には古墳群の頂点をなす２基の前方後円（方）墳が造営されました。

こうした情景は、折々の日の出の指標となった龍王山山帯を正面観とする景観設計すなわちランドスケープ・デザインに他ならないと考えます。日の出暦は太陽信仰と密接な関係をもちますし、水稲農耕文化における水源地への信仰は稲魂信仰とも不可分に結びつきます。唐古・鍵遺跡が営まれた弥生時代の段階ではこれら二種の神観念や信仰が龍王山山帯に付託される格好で成立したと理解され、続く古墳時代にはそこに祖先崇拝を接続させて三種の神観念を同調・融合させたと解釈できます。東の山並を正面観に据えたこの景観設計を「坐東朝西」のランドスケープ・デザインと私は呼んでいます（右図参照）。



古代中国における前漢代までの古相の方位理念は太陽の運行に沿った「坐西朝東」でした。ところが王莽の新を境に方位理念は90°回転し、天の北極を世界の頂点に据えた北辰信仰へと移行します。それが新相の方位理念「坐北朝南」です。古墳時代の日本列島では、古代中国側の古相の方位理念を依然として色濃くとどめ、かつ「坐西朝東」を裏焼きにした方位理念が採用されたと考えられるのです。そのことが、のちに厩戸皇子が隋の皇帝に向けて自らを「日出るところの天子」と名告ったことの遠因にもなったといえるでしょう。

４．「御諸山」は本来、龍王山の山並であった

以上の分析作業をふまえると、『古事記』や『日本書紀』に記された「御諸山」や「三諸山」は三輪山単独峰をさしたのではなく、龍王山一帯の山並をさすものだったことがわかります。

そもそも「〇諸山」という記載は、どこまでも「並びたつ山」で、指示する内容は複数形の嶺峰であることを明示しています。紀・記の編纂者たちも「諸」や「三」の字義を正しく理解したうえでこれらの字をあてたとみるべきでしょう。それを「室」（ムロ）からの転字だと解釈し直してみたり、三輪山単独をさすとみなした瞬間に誤読へと誘われます。『古事記』では別に「美和（山）」の表記があることにも注意が必要です。こちらについては、三輪山とその前面に設けられた大神神社に引きずられた表記か、あるいは使い分けだと判断できます。

万葉集を参照する　そしてこの問題を考えるうえで、次の万葉歌は参考になると思います。

三諸つく、三輪山見ればこもりくの、はつ瀬の檜原おもほゆるかも（『万葉集』巻七）

この歌にある「三諸」を三輪山とみなせば、枕詞が意味をなさなくなります。ここでの「三諸」はあきらかに三輪山よりも上位の概念で、いわば敬称へと昇華しつつあった文言が「三諸」でしょう。したがって「三諸つく」は、「三諸と呼ばれるまでに昇華した霊峰」となり、これを枕詞として「そのように形容される諸峰の一翼を占める一三輪山を見れば…」と解すのが自然です。

もうひとつ、次の歌は決定打でしょう。

三諸の、その山並に児らが手を、巻向山は継ぎの宜しも（『万葉集』巻七）

ここでも「三諸」を三輪山とみなせば、次の「山並」が意味をなしません。「三諸」は龍王山山帯の山並であり、その一角にある巻向山近隣の嶺峰の並びようを誉めた歌だとみるのが自然です。このうち本歌の対象となったのは、北から弓月岳（斎槻ヶ岳・穴師山）・巻向山・三輪山であったと推定されます。さらにこの歌の場合、歌い出しの「三諸」は「ミツモロ」と詠むべきことを示唆してもいます。

要するに『古事記』の「御諸山」、『日本書紀』の「三諸山」とは龍王山山帯をさす聖山の総称であり、それは唐古・鍵遺跡からみた年間の日の出の運行と関連づけられた山並であったことに由来したのです。大和王権は在地の弥生時代伝統に根ざした景観に適宜上書きをおこない、坐東朝西の大和ランドスケープ・デザインを再設計したのだと考えます。その頂点に位置づけられた龍王山山帯の嶺峰に対して大物主から倭大国魂などの諸神格を振り分けた、それゆえの「御諸山」であり「三諸山」だったといえるでしょう。万葉歌人もその由来については正確に理解していたのだと思います。

以上、景観・天文考古学の立場から『古事記』の記載を点検してみれば、定説とは異なった、より重要な意味がみいだせると考えます。

御諸山の南端峰、三輪山からの冬至の日の出（唐古・鍵遺跡から）